

# 朝日新聞における谷亮子の表象に関する研究

## A study of representation of Ryoko Tani in Asahi newspaper

1K05B215

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

宮川 碧

副査 石井昌幸先生

### 【目的】

この論文で取り上げることにした谷亮子選手は、1992年のバルセロナオリンピックから、今年開催された北京オリンピックの五大会まで出場した。彼女は、その全大会でメダルを獲得するという素晴らしい成績を残し、誰もが認める国民的スポーツヒロインと言えるだろう。幼い頃から新聞というメディアに取り上げられてきた谷選手が、今までどのように新聞で描かれてきたのか、そして谷選手の成長や結婚・出産などの生活や環境の変化によって報道にどのような違いが見られるのかを調べ、谷選手のスポーツヒロイン像や、新聞というメディアが抱える女性競技者の報道に関する問題点などを明らかにしたいと考えている。

スポーツヒロインは、昔から存在していた。オリンピックにはじめて女性選手が出場したのは1990年のパリオリンピックである。そこでテニスに出場したウィンブルドンのチャンピオン、イギリスのシャーロット・クーパー選手が女性選手初の金メダリストとなる。オリンピックにおける日本のスポーツヒロインは、日本人女性として初めてオリンピックに出場した人見絹枝だろう。彼女は、アムステルダムオリンピックにおいて、陸上・女子八百メートルで銀メダルを獲得した。その後、1936年のベルリンオリンピックで、兵藤(旧姓:前畑)秀子が、水泳の二百メートル平泳ぎで日本人女性初の金メダルを獲得し、新たなスポーツヒロインとなった。2004年に開催されたアテネ大会では、女性選手の数が男性選手を上回り、日本における女性選手のめざましい活躍を象徴している。そのような現代において、日本を代表するスポーツヒロインである谷

選手について調査、分析していく。

### 【分析】

朝日新聞に「田村亮子」の名前が出始めたバルセロナオリンピック前年の1991年から、今年行われた北京オリンピックまでの調査期間を各オリンピックが開催された年ごとに五つに分類した。そして、「田村亮子」「谷亮子」の名前が載っている記事全てにおいて、谷選手を表す言葉や表現を抽出し、どの言葉がどれだけ使われたかを数え、またどのような内容の記事が多かったのか調査し、そこから谷選手がどのようなスポーツヒロインとして描かれてきたのかを検証した。

谷選手は、バルセロナオリンピック以降、男女の性別を乗り越えた中性的で、誰もが親しみやすい普通っぽさを兼ね備えたスポーツヒロインとして描かれている。アトランタオリンピックでは、「みんなのヤワラちゃん」と言ったような国民的アイドルとして描かれ、シドニーオリンピックでは、一人の柔道家として、一人の女性アスリートとして競技成績のすごさが強調されている。アテネオリンピックまでの四年間は、プロ野球選手・谷佳知の妻として、北京オリンピックまでの四年間では、ママさんアスリートや子育てをしているママたちの代表といったような女性と表現されている。

### 【結論】

上記のように、朝日新聞による谷亮子選手の描かれ方は、谷選手の成長や結婚・出産といった生活や環境の変化とともに変わってきた。谷選手は最初、少年のような「中性的な存在」として描

かれていた。しかし、大学生になった谷選手に新聞は、普通の女子大生らしい「女らしさ」を求めるようになり、結婚し妻となってからは「夫の助けを必要とする弱さ」、出産し母親となってからは「家事や育児と柔道を両立する強さ」を求めるように変化していった。つまり新聞は、世間一般的な女

性の生き方とされるモデルを谷選手の生き方に被せ、世間一般で言う「女性らしさ」を谷選手の成長に合わせて描いてきた。

このように新聞は、常に谷選手の成長段階に女性の生き方のモデルを当てはめ、報道してきたのである。